東九州支部報

第 54 号

社団法人　日本山岳会　東九州支部
2011 年 7 月 25 日発行

目　　次

1．会務報告
（1）支部長会議……　加藤英彦　1
（2）通常総会報告……　加藤英彦　1
（3）日本山岳会自然保護全国集会　加藤英彦　2
（4）九州 5 支部合同集会……　久保洋一　3
2．活動報告
（1）4 月月例山行……　久保洋一　4
（2）5 月月例山行……　中野　稔　5
（3）6 月月例山行……　岐部威吉　6
（4）ヤブ山報告……　安部可人　7
（5）はるかなる山の呼び声に誘われて　星子貞夫　8
（6）私の無名山ガイドブック no.46…　飯田勝之　10
3．トピック
（1）「３４年のあゆみ」……　西　孝子　11
（2）ペンリレー……　三浦敬志　11
（3）より安全な登山のために……　安東桂三　12
4．インフォメーション
（1）月例山行詳細情報 7 月～10 月…　14
（2）書籍情報……　14
（3）行事予定・編集後記……　15

注：会務報告・活動報告・トピック・インフォメーション項目の仕分けは編集後記をご覧ください

平成 23 年度　第一回　支部長会議

加藤英彦

平成 23 年 6 月 18 日(土)日本山岳会集会室　受付開始　午前 10 時　開会　10 時 30 分

受付を済ませると資料をいただき集会室へ各支部毎の札が置いてあり、それぞれが位置に座る。10 時 30 分開始。副会長　宮崎紘一　開会の挨拶、会長　尾上昇　挨拶。その中で新法人移行に伴うこれまでの推移を簡単に説明。午後の総会についても協力よろしく。

1)　議題に入る前に新支部長の紹介。本来なら一人ずつ挨拶をするところだが時間の関係上司会が名前を読み上げそれに従って支部長交代した 7 支部の支部長が立って名前を言う。東九州支部も最後に呼ばれて名前を紹介するだけ。

2)　通常総会議案についての説明がある。定款の審議をする。

3)　新法人移行に伴う「支部に関する規定改正」(案)についての説明。新法人プロジェクトチーム吉永リーダーより説明。

事前に配られた「支部に関する規定」の説明。

特に第2条(支部の定義)「この規定において支部とは一定の地域に属する会員が相互の連絡並びに懇親を密にし、自律的な運営のもとに自主的な活動を行うことを目的とする組織をいう。

支部の三つの要件　　1)事業の一体化
　　2)会計の一体化
　　3)人事の一体化

以上の3つの要件を満たせば支部として認められる。名称について「公益社団法人　日本山岳会○○支部」とする。

支部長については会長が任命する。(人事の一体化)会計については支部の経費は本部からの運営交付金及び事業補助金をもって充当する。支部会計は従来どおり報告する。そして本部からの支給された分については使った分だけを報告、但し領収書のコピーを添付する。従って2つの帳簿が必要になるだろう。二重帳簿ではなく補助簿という考えでやってくれ。(会計の一体化)その他、支部に関する規定の細部にわたっての説明(支部の立場が内とするか外とするかの説明)の質疑があった。

次に山の日制定報告、支部活性化報告、JAC－Youth 報告以上3件は議題にはあったが今回は割愛をした。その他のことで四国支部の設立準備が進んでいるとの報告(徳島　人員 43 名)

大災害の義援金にもふれた解説があり、12:15 終了した。本部より数分のところで寿司の昼食をとる。移動して 2 時からの総会を待つ。

平成 23 年度　第1回　通常総会報告

加藤英彦

平成 23 年 6 月 18 日(土) 午後 2 時　会場　千代田区　主婦会館プラザエフ　6F　会議室

受付にて懇親会会費 3000 円払いリボンと総会資料をいただく。2 時には会場が満員となった。近年にない大人数だという。審議事項に大いに興味があるからだということだ。

定刻 2 時開始。副会長、開会あいさつ。会長が今日の総会の重要性について触れながら挨拶。会員数 5109 名、本日出席者 198 名、委任状 3976 名。よって、本日の総会が成立すると説明あり。ところがいきなり委任状についての質問が飛び出す。今回委任状を郵送してきたその文章について問いただす。それによると今まで委任状の書き方については一切説明なかった。「今回定款が承認されなかった場合は当会は解散となり財産は寄付することとなります。」この文章は一種のおどしであり、それによって出された委任状は無効である。従って今日は議決できないといきなり反対勢力の質問で始まった。定款の承認という非常に微妙な問題の審議ではあるが次から次へとよくもまぁーそんな質問を考えるなぁーといった質問が続く。特に議論があった項は役員に任期について第 30 条(2 年)役員の定年制細則第 9 条(70 才)について、はたまた「自然保護」という文言がこの定款から消えている(第 4 条第 5 項)のはどうしてか。最後は字句の問題で「及び」と書いてあるのは「もしくは」か「又は」ではないですかといった細かい点までついてくる質問責めである。

一方執行部の方はプロジェクトリーダー吉永氏を中心に防戦一方である。それでも基本的な方向は 3 月総会で「公益社団法人」に進むよう議決されている。本日の総会はそのため約款の変更を裁決してくれ、そうでないと来年四月の新法人移行が時間的に間に合わない。この約款も内閣府の方と綿密に 3 回打ち合わせモデル定款としたものだ。するとその内閣府の担当者は何という名前かという質問まで飛び出す始末だ。色々と意見が出るものだから誰かの提案で、今日この会場に 3 人の元会長がみえられている、その方々の意見も聞いてみてはどうかとの提案があり、大塚、齊藤、平山の順で元会長の意見があり、3 人

ともだいたい同じように、急ぐことはない慎重に審議してはどうだろうかとの見解であり、今日の裁決は見送ってという動議を出したところ、総会では動議は受け付けないと言い出した。定款については変更できないが付則にて検討できる余地を残す含みでどうだろうかと提案が出た。確かに書いてある「公益法人申請の審査において一部文言の修正の可能性がありますが理事会に一任願います。」そうこうするうちに時間がたつものだから早く裁決をしてくれ、帰る時間がせまったという意見まで出る。すったもんだの意見だったがやっと5時過ぎ休憩もないまま裁決に入った。前席から一列ずつ賛成の方は挙手、それを何人かで慎重に数えてメモする次に同じ方法で反対する人に挙手してもらい数える。全部数えるのに約20分。それから委任状とのチェック。委任状に名前を書いて委任したものはその名前の人が賛成か反対で読み上げながらの数のチェックあり、やっと集計発表。

・賛成　　出席者　147名　　委任状　3870
　　計　4017
・反対　　出席者　37名　　委任状　99
　　計　136

これで第1号議案が無事承認された。ここで退席する人が多く出た。

5時30分、十分間の休憩で第2号議案へ。

第2号議案　平成22年度　事業報告承認の件

日本山岳会再生プロジェクトが4つあるがそれぞれにかかった経費は、その活動によっては取りやめてもよいのではないかという質問もあった。この裁決は全員の挙手で承認された。

第3号議案　平成22年度　収支報告、財産目録、承認の件

ここで又議論が出た、というのも決算において赤字が出た、その補填の為に積立金をかなりの額取り崩しを行っている。そのことに集中的に異論を唱えている。待機している監事である税理士先生も答えているのだが意見がかみ合わないのか納得しないと質問を続ける。時間は懇親会開始の6時30分を過ぎているのにまた関連質問が続いていく。やっと裁決して承認される。

第4号議案　平成23年度　除籍予定者の件

第5号議案　平成23,24年度　理事・監事・評議員の承認の件

この最後2件は提案どおり承認。この辺になると皆いい加減疲労の為意見も出ずに承認。やっと7時30分過ぎ長かった総会を終了した。

－感想－

日本山岳会は確かに個人で加入して成り立っている会で個人の意見は尊重される。民主主義のルールに基づいて総会も民主的に運営される。様々な意見の持ち主がいることもわかったし又考え方もそれぞれである。その道の権威の持ち主もいれば又詳しい知識を持った者もいる。要するに十人十色である。そういった人達が一堂に会しての総会はまた壮観である。一地方の支部から初めて総会に参加してみて感じたのは、なぜに今までこういった事態を支部の会合なり役員会なりで討議し勉強しなかったのだろうかと。或る支部は支部全体の意見をまとめてきていて裁決の時に○○支部は全員賛成だと堂々と述べていた。それだけ今回の議案について支部での話し合いをしてその結論を持って総会に代表が出席しているのだ。支部の役員として選ばれたものがそういった議論の場を支部で持つことで一人ひとりの意見や考え方を聞き又それについて勉強し理解する場を持つことは大いに有意義だと思う。ただ会報“山”を見るだけではその場の臨場感もわからない。今度の総会に出席してそういった感想を持ちながら支部会員にこういったことを伝えるのも又選ばれた者の努めであると思った事である。

日本山岳会自然保護全国集会に参加して

加藤英彦

6月11日　福岡市9時西鉄イン福岡受付。　9時30分より開始　出席者全国20支部　会長・他会員64名・一般4名・講師4名・招待者5名。

冒頭　今回の東日本大震災で亡くなられた方々、及び今回の基調講演を予定していた松本征夫元福岡支部長が急逝されたとの二つの出来事に対して、御冥福を祈って黙? があった。

福岡支部長、副島勝人歓迎の挨拶、司会は宮澤克禮自然保護委員長で始まる。各支部長からの活動報告事前に配られた自然保護委員会作成の冊子「木の目、草の芽」に掲載されたものを参照しながらの説明・報告とする。

1) 埼玉支部　　「自然保護委員会の活動報告」
2) 信濃支部　　「2010年度・支部報告」
3) 岐阜支部　　「支部活動報告」

山梨支部は欠席に付、冊子の報告に代える。以上の報告の後、本日出席の各支部より自然保護の取り組みについての報告がある。南からの指名という事で宮崎支部に次いで2番目に東九州支部が指名された。自然保護委員2名が欠席していたので代理として新しく支部長になって出席した事を前置きにして、東九州支部としての取組を報告した。「九重の自然を守る会」に数名の会員が入って活動している。この会も今年で50周年を迎える事、その他の「猪ノ瀬戸を守る会」等と連携を保って自然保護活動に取組んでいきたい。

九重山の登山ルートで最近5つのルートを立入禁止にして通れなくなった。これも植性保護のための出来事である、と報告。　その後全国からの支部の報告があり、途中から参加の尾上会長から会の現状についての挨拶が

あり午前の部が終了。 午後の部 1時開始 まず元福岡支部2名の方の基調講演。ここで当初予定していた元福岡支部長松本征夫の代わりに報告「屋久島問題とりくみの経緯と課題」

講師 山川陽一本部の自然保護委員、世界自然遺産プロジェクトリーダー講演「エコツーリズムとはなにか」広瀬敏通・日本エコツーリズムセンター代表理事以上各1時間、ここで休憩。

次にパネルディスカッション「これからの屋久島を考える」パネリスト5名　司会 山本博 福岡支部自然保護委員

伊藤秀三（日本ガラパゴスの会会長・長崎大学名誉教授）・広瀬敏道（日本エコツーリズム代表理事）・井上晋（福岡支部自然保護委員・元九大助教授）・太田五雄（福岡支部・屋久島在住）・山川陽一（本部自然保護委員・世界自然遺産プロジェクトリーダー）

それぞれの専門分野からの屋久島問題の取り組みや現状報告。今後の提案など様々な討論が行われ、熱心なそして活発な意見の交換会であった。印象に残った点をあげると、屋久島は世界自然遺産に登録されたために逆に、自然破壊につながっている。日本人にはこの西洋人の考えである「世界遺産」というような理念があっていないのではないか。つまり規制や制約をさせられている屋久島のガイドについての問題。「ガイド」という言葉が一人歩きをしていてそれが「観光ガイド」なのか「登山ガイド」なのか、はたまた「山岳ガイド」なのか混在しているようだ。

自然保護をテーマに活動していると言うとその思想・活動等が変なふうにとらえられる傾向にある。エコツーリズムという言葉をもっと理解していく必要がある。行政としては、自然保護運動をしてもらってはこまるといった考え方がある。

鹿対策についての意見が出た。結論は出なかったが今後屋久島については、入山規制等必要になってくる時期が迫ってくるように感じた。

以上様々なそれぞれの立場での意見や考え方、問題提起が出た。またそれを聞いていて色々と考えさせられる事が多かった。いずれにしてもこの自然保護運動というのは我々山岳人にとっては大切なテーマであり継続して取組んでいかなければならない問題である事を学んだ集会でした。

6時30分より懇親会が開かれ、全国の参加者達と意見交換をした有意義で大変盛り上がった会であった。支部としても自然保護委員を中心として年一回ぐらいは意見交換会が必要であると考えた次第である。尚、翌日の宝満山登山会は雨のため観光に切り替えて実施されたようである。（私は不参加でした。）

九州５支部合同集会

久保洋一

6月4,5日で九州5支部集会が熊本支部の主管で行われた。場所は「阿蘇いこいの村」である。午後3時から開会だったので2時30分までに会場に着くように考えて自宅を6月4日午前9:10に出発。猫子岳に登って会場に行こうと思って少し早く出た。265号線から東峰登山口の方へまわり、午前11:47 登山開始。大戸尾根をひたすら登り13:05 山頂着。登山道の脇には山シャクヤクが登山道をふさぐように群生していた。花の頃また来て見たいものだ。山頂には福岡から来た年配者のグループ（7～8人）がいた。お互いに写真を取り合うなどして会話を交わした。山頂からは天狗岩が見える。今日この時間から天狗岩へ向かうと集合に間に合わなくなるので今日は写真だけ撮ってあえなく下山。天気はやや霞んでいるが晴れだ。やや急ぎ気味に下山し、13:52 登山口の車に到着。早速「いこいの村」へ向かう。2:30 ちょうど予定の時刻に到着。中野さんの車があった。

ホテルロビーのソファーの前で受付を済ませ、3時まで少し時間があるのでお風呂に入って会場へ。

まず、熊本支部長 工藤文昭氏から歓迎挨拶があり、引き続いて本部から来られている宮崎紘一副会長の挨拶があった。さらに各支部の支部長から各支部の近況報告。北九州支部 伊藤氏、東九州支部 加藤氏など新しい支部長も加わっての挨拶だった。参加者は65名の盛況で後ろの方の席では一部声が通らず聞き取りにくかった。その点、加藤支部長の声はよく通っていた。あっぱれ！

このあと、宮崎副会長の「日本山岳会が目指してきたこと」との演題で講演があった。講演のあと宮崎氏に対して本部サイドの考え方を問うなかなか熱心な質疑応答があった。

その為、懇親会の時間を30分繰り下げて6:30からとしたくらいだ。さて、お楽しみの懇親会だ。宴会が始まる前にお酒の差し入れの報告があり、我が支部の甲斐副支部長は所用で集会には出席できないのにわざわざお酒を

届けに駆けつけて来てくださったとのこと。ありがとうございました。宴会は歌あり、踊りありでとても盛り上がった。私たち東九州支部も全員で坊がつる賛歌を歌った。特筆すべきは宮崎支部で、ひょっとこ仮面をつけた踊りは会場を一段と沸かせた。私は日本山岳会 100 周年記念行事を宮崎のえびの高原で行った時以来 2 度目だったが、また一段と踊りに磨きがかかっているようにお見受けした。

6 月 5 日（日曜日）天気　雨。午前 6:00　起床。7 時朝食。8:00 ホテルの玄関前でバスに乗車し、草千里展望所まで運んでもらう。雨はかなり激しく降っている。参加者は各班 11,12 名、ただし 6 班は観光コースで 4 名の 6 班に分けられ、各班のリーダーを熊本支部のメンバーが行った。私と中野さんは 2 班だった。展望所の建物の裏側に向けてついている舗装された小道を登って行き杵島岳山頂 9:24 着。風も強く雨も降るので早々に次の山に向かう。私はこの山頂で宮崎副会長と少し話しをする機会を得た。火口を半周してそれから下り往生岳と杵島岳の鞍部に到着。ここでトイレ休憩をし、あとのメンバーが到着するのを待った。全員が揃ったところで往生岳へ。かなり急な登りだがそれ程の距離はない。往生岳最高点（1265m）を通過し往生岳三角点に向かう途中で登山ルートからはずれ、一気に下ろうとしているが天気は悪く、ガスで周囲も見えないので熊本支部のメンバーがだいぶ迷っている様子だった。私たちはそこでしばらく待っていた。ちゃんと下見に来て確認はしていたらしいのだが、この天気では致し方ありません。事前に旗でも立てておけばよかったのかもしれませんがこういう天気のことまでは考えてなかったってことでしょう。いつもだと一面が見渡せる草原なのだから。かなり急な坂を一気に下っていく。やがて牧道に下りついた。

実はこの牧道に到る最短ルートを熊本支部の人が事前の調査で見つけておいてくれたらしかった。牧道を下っているとガスが晴れ、先ほどまで見えなかった往生岳の全容を見ることが出来た。今度、晴れた日にもう一度来てみたいものだ。牧道を下っているとき、星子さんが、ガスが晴れて見え出した山の端を指して、あそこが虎ヶ峰、あそこが鷲ヶ峰と教えてくれた。星子さんの学生時代のホームグランドだ。やがて高塚（12:53）を経由して「みんなの森」に着いた。ここで、みんなで昼食をとった。昼食後、熊本支部の工藤支部長から阿蘇の草原を守る為の野焼きなど阿蘇の自然に関するお話があった。その後、車道を通って「いこいの村」に戻った。ありがたいことに熊本支部の計らいで、宿泊したホテルのお風呂に入ることが出来た。お風呂の後、一堂に会して解散。

4 月　月例山行報告　　･･･久保洋一

中ノ嶺･田詰･草木藪･太田

4 月 17 日　午前 6：00 サニー前に集合。天気曇り。

雨は降りそうにないので日差しがなくてちょうどよい。高速で佐伯まで行き 10 号線で杭の内（くえのうち）から左折し、3km ほど南下して、中ノ嶺の北に東西に走っている法面の吹き付け工事を終えたばかりの道路の脇に車を停めて、谷沿いに山に入る。北に伸びている尾根から県境尾根に取り着く。このあたりは杉の植林地だ。さらに 50m ほど南東に県境沿いに歩いて山頂に着く。山頂部まではゆるやかな登りだ。赤いテープが尾根にはあった。山頂は全く眺望がきかない。

山頂で記念撮影をし下山。車に戻り林道で 1km 程北上する。四等三角点　田詰（437.8m）に一番近い場所で車を停めて山に入る。5 分程で山頂。ここも全く眺望はきかない。三角点のまわりを整備し、記念撮影。車に戻り元の林道を戻るとき「たらの芽」を取る。さらに先程の県境あたりまで林道を戻り、今度は地図の上では繋がっていないが工事中の道路を通過してうまいこと次の三角点「草木藪」の横を走っている林道に接続した。先程戻った県境から 1.5km 程進んだところだ。手前の道路脇の広場に車を停め少し道路を下って三角点の位置にもっとも近いところから山に入る。谷沿いに尾根に突き上げる。距離は短いがかなりの急登である。尾根に着き緩やかに登りながら 50m 程さらに北上したところに三角点があるはずだが 3 人の G.P.S.が示す位置が微妙に異なっている。

そのあたりのウラジロを刈り取ってきれいにし、5人で20分程探したが見つからない。これはもう無理だとあきらめかけていたとき、私と中野さんのG.P.S.が示していた地点の中間あたりに飯田さんが座り込み鎌で土を切るようにして探し出して程なくカチッという音がした。鎌が石に当った音だ。これはと土をのけていくと5cmくらい地中に埋もれていた三角点が姿を現した。皆で飯田さんの執念に感心した次第である。下山後林道沿いの山菜を収穫し、次の三角点「太田」へ向かう。水越峠の手前500m、南へ荒れた作業道がゆるい谷沿いに走っている。ここを500mほど入ったところで昼食。遠江さんがたらの芽、藤の花、わらび、たんぽぽの花などの天ぷらを手際よく揚げてくれた。皆でとてもおいしくいただいた。もう一つは豆乳ベースの猪鍋。これは大量に作った為、食べきれないくらいだった。食後の片付けは西さんと遠江さんにお願いして私たちは大分かくれ名山にも紹介されている太田（三等三角点 387.3m）へ向かった。林道をさらに気持ちだけ登り、そこから谷沿いに入って鞍部まで登るとその先は開けていた。開けた谷あいを右に見ながら尾根沿いにさらに進むと太田に着いた。

眺望もきかないし、どうしてかくれ名山に選定したのかと訝しがる面々であった。下山後中野さんたちとは現地解散し、私たち（飯田さん、遠江さん、久保）は小野市経由で大分に戻った。

参加者…西孝子、飯田勝之、牧野信江、遠江洋子、中野稔、久保洋一

5月　月例山行報告　　・・・中野　稔

倉岳(682m)、老岳(586m)

始めに、インターネットやガイドブックで書かれている事は、なるべく書かないようにする。知りたい人は、自分で調べて下さい。

今年のテーマが島巡りで天草の山々への御挨拶となった。目的は茅野会員の近況を伺う事と天草の山々の現状を確認するためだ。天草五橋は有料道路として1966年に開通し、建設費用が償還されたとして1975年に無料開放されている。私が初めて天草を訪れたのは1990年代で、登山というよりも観光旅行に近かった。天草五橋が主目的で宇土半島の先の三角町から大矢野島に架かる橋が五橋の一つであり、大矢野島と倉岳のある上島に渡る橋が残りの四つである。大矢野島のほぼ中心に天草四朗メモリアルホールがあるが、興味のある人は前世でお世話になったり、何らかの影響があった人達であろう。天草パールラインを快調に飛ばすと天草五橋は本土と四国に掛かる三本の橋に比べるとミニチュアの様に感じる。島を結ぶ橋には両島の人々の夢と希望が掛けられている訳で、大切な明日に架ける橋に変わりはない。上島の有料道路に乗ると最初の目的地老岳の登山道路を通過してしまい、10ｋｍ位引き返し山頂まで続く道路に出た。倉岳は老嶽の南に約7ｋｍ、次郎丸嶽は老嶽の東に約7ｋｍに在る。

老嶽の山頂部には高さ10メートル位の展望台があり、360度の展望が得られる。山というものは大抵朝日か夕陽の頃が一番綺麗な姿を見せる。老嶽へのアクセスは知十IC を降りて知十橋の1キロ南から西に延びる広域林道で行けば老嶽の南約1キロを通過する事になる。高速ではないから登山道へのアクセスは期待できるだろう。今年の山行のテーマが「島巡り」である。最も海水がなくなれば、この惑星は、一つの地殻で覆われているに他ならない。一つの大陸で有り、海水のお陰で、大陸や島などに分けられているが、月や火星、水星、金星と同じ様なものだ。木星や土星などにこの惑星の住人が訪れた時に真実を知る事になるだろう。惑星の生成過程や、崩壊過程は似ているからだ。地球という惑星は、平凡でごく普通の惑星でしかないという情報を集めて40年余りになる。島も惑星も似ているという発想だ。

沖縄島、佐渡島、奄美大島、対馬、淡路島、天草下島、屋久島、…、が島の面積順だ。大分市が500平方ｋｍで屋久島とほぼ同じで、佐伯市が900平方ｋｍで佐渡島よりも少し広く、天草下島が574平方ｋｍ、天草上島が225平方ｋｍだ。因みに大分県の姫島が6.79平方ｋｍで2,011年の人口は2,189人で、1975年当時は3,200人住んでいた。このように書いたのは、知るという作業は無限に続き終わりはない。例えれば、恋愛の様なもので、永遠に続く恋想ゲームに近いと思う。私の知る限りでは、思考停止する事が、知るという事と思いこんでいる人しか会った事はないし、これからも会う事はないだろう。無知な人や無能な人はいない。ただ、理解しようと努力する必要が無いと信じている人がいるだけだ

と思っている。登れない山はない。理解できない事はない。出来ない事はない。成功するまで、挑戦すればいいだけの事。かく書いたのは、すべての事を理解しなければならないようになっていると歴史が語っているからだ。上島と下島を結ぶ瀬戸大橋はループ橋になっていて、橋の下を船舶が往来している。角山は下島のほぼ中央に在り、標高 526 メートルで一等三角点とその解説付きのステンレス製の看板板が設置されている。山頂付近の舗装された林道から往復で 30 分位、登山と言うよりもドライブに近い。そして茅野さんがお世話になっているケアハウス聖和園を目ざして腹ごしらえをし、11 時半過ぎに下山する。午後 1 時に加藤支部長と待ち合わせて、茅野さんと面会する予定だった。12 時半には入口に着き車の中で待機したが、加藤さん達が 30 分遅れたため午後 1 時半の面談となった。下川さんが喜寿のお祝い登山の写真を渡したときは満面の笑顔を見せていた。東九州支部に参加して 10 年も経っていないから、茅野さん達の活動は書籍や噂だけでしか知らない。加藤支部長や西さんは私よりもはるかに詳しく茅野さんの登山歴や活躍を知っている。尽きる事のない思い出話に花が咲き、別れ際には天草のお酒を飲みなさいと酒代を渡された。

茅野さんが後生大事に握っている杖には、大分の山で入手した想い出と使い込んだ月日の重みが浸み込み輝きを増しているように感じた。上島から下島へ再度渡り今宵のキャンプを角山に登る途中にある福連木（ふくれぎ）子守唄公園オートキャンプ場に決め、途中のスーパーで食料を調達した。夕刻には、片道 10 分余りの下田温泉センター白鷺館の湯で旅の疲れと汗を流しキャンプ場に戻り、天草の酒と食事で夢路に着く。あさは、5 時に起き食事をして 6 時半にキャンプ場を後にした。車一台に付 1,500 円支払った。茅野さんがお世話になっている上島へ渡り、天草の最高峰倉岳をめざす。

此処も登山というよりもドライブの要素が強い。もはや登山の醍醐味は、九州では殆ど期待できないということらしい。従って、登山客よりも観光客の方が多い。逆に、登山の喜びを得られる山は希少価値を得られ、絶滅危惧種の仲間入りとなる事間違いない。縦割り行政の負の象徴として歴史の証人となる事が運命づけられているのかもね。その点、次郎丸岳（397m）、太郎丸岳（281m）は登山するという喜びを与えてくれる。近くには、蕗岳（つわだけ）、白嶽、念珠岳があり懐かしさがこみ上げてくる。登山口は、小鳥峠と呼ばれ右手の尾根に入れば白岳、蕗岳への案内版が建てられている。参加者全員で左手に在る登山口から山頂を目指す。西さんは遅れながらも山頂まで 10 分ぐらいに在る展望台の岩場まで来ていた。加藤支部長、飯田さん達は次郎丸岳から太郎丸岳へと縦走をして西辺集落に下山するというので、11 時 15 分頃次郎丸の山頂から小鳥峠へと引き返し、車で迎えに回る。12 時半ごろ小鳥峠から加藤車と 2 台でつるんで天草 5 橋の一角にある食堂に立ち寄る。行きは高速で 4 時間半余り、帰りも似たようなもので千円の割引や無料化実験の恩恵は 6 月頃で打ち切られている。これからも朝令暮改の行政に国民は振り回される事だろう。浅野史朗さんの「明日の天気は変えられないが、明日の政治は変えられる。」という言葉と、ネルソン・マンデラさんの言葉で「我々が最も恐れてはいけない事は、人には無限の可能性がある。」と云う事ですね。恐れるべき事は、これ以外この世に存在していないという事ですか。　参加者　西、加藤、飯田、下川、塩月、中野

6月　月例山行報告･･･岐部　威吉

屋形島　龍王山（198.7m）、
深島　　深島（98m）、南深島（79.8m）

今日のメンバーは、飯田、中野、久保、石川、西、遠江、宮本、岐部の 8 名です。

中野さん、久保さんの車にそれぞれ分乗してサニースポーツを 5 時 30 分に出発。

光吉インターから東九州自動車道に入り佐伯方面へ、早朝なので交通量は少なく順調に進み佐伯インターで降りてコンビニで昼食の買出しをして蒲江港へ向かい 7 時 10 分着。

帽子が飛ばされるほどの風が吹いているので船は運行するのだろうかと思いつつ、飯田さんが蒲江観光の人に聞いたところ、無理むり、波が 4m もあるよと言われて諦めるしかない、さてどうする？全員でつかのま思案した結果、焼飯山、轟山、米突山に登る事になり、まずは焼飯山へ。

車で県道 37 号佐伯蒲江線に入り、しばらくして左折し蒲江隧道に到る舗装した旧道を登る。トンネルを過ぎて未舗装の林道をさらに 10 分ほどで登山口に着いた。身支度を整え、白いガスに包まれた気持ちのよい林を歩き始める。北西尾根へ、とりつくとすぐに急登で噴出す汗を拭きながら歩を進め山道を行くと、運動不足の体にはこたえましたが、さわやかに吹き渡る風が心地よく、空気がひときわ美味しく感じられました。約 30 分で尾根に出て、それから快適な尾根歩きで頂上焼飯山（349,4m）4 等三角点です。次は、轟山で、蒲江隧道南口の横から急斜面に取り付き、多分トンネルの真上あたりが頂上じゃないかなと思いながら、照葉樹中心の尾根を登ると約 40 分で轟山（430m）3 等三角点に着きました。

下山は轟峠に下り、この峠は蒲江浦、野々河内、佐伯市の青山の三軒屋を結ぶ峠で標高（340m）です。山地は米水津との境界をなす石鎚山、石草峯、蒲江北方の轟峠から西方へ坂本山（507.2m）、ハゼリ山（564.6m）峰を経て最高峰場照山へ到る。ここがかつての生活や交易の道なのかと思いをめぐらして、小休止。峠から 15 分でトンネルの佐伯方面北口へ出て、トンネルの中を歩いて、登山口に向かいました。トンネルは素掘りで風がスーッと抜けて天然のクーラーです。登山口 10 時 7 分着。次の山は米突山で半島の内陸部の蒲江浦まで車で移動。10 時 40 分峠の小向トンネル登山口着。歩き始めると結構長く急な上りが続き尾根に出るまで 30 分、ここから緑の尾根歩きで幾つかのアップダウンを繰り返し、小ピークで小休止。

息を切らしながらザックから、ポカリスエットを取り出し喉を潤し、一息つく。ここから 20 分で頂上に着きました。米突山（151m）4 等三角点 11 時 40 分着。

下りは少し余裕ができたので周囲の景色を見ながら歩くと、時折樹間から蒲江港や蒲江の町並みが見え、それとヤマモモの木が意外に多くてそうか、ヤマモモは蒲江の町の木だったんだと気がつきました。（町の花は浜木綿です。）12 時 10 分登山口着。

昼食は高平展望公園ですることになり、公園に着いて、車から降りると日向灘からの吹き抜ける風が強いのでレストハウスの感じのよいおばさんにお願いして昼食をそこでさせていただきました。窓から外を見ると眼下に日向灘に繋がる岬が果てるまで続き、深島がシルエットになって浮かんで印象的でした。帰りは道の駅蒲江に寄り、蒲江名物渦巻きを買って、名残惜しいけれど、ここで解散。島には渡れませんでしたが、静かな山歩きを満喫した一日だった。

ヤブ山の話 ・・・・・・　安部　可人

近郊のヤブ山は半日、散歩あるきの手軽さがある。高度差50m、30分で終わる場合が多いし、その程度の山を選択している。大野、直入あたり三角点残りすくない。三角点探しは1回かぎりの未知の世界への魅力であろう。原始人の孤独感がたまらない。身勝手、誰も助けてくれないスリルがある。

2度目は別ルートならまあよかろう。いよいよとなれば三角点のない山もよかろう。史跡探訪かねて筒井ヶ城　233m、利光山　193mなどがよかろう。

この遊び、GPS（60ＣＳＸ）なしではやれない。でも油断すると別方向で迷うが、修正するのも楽しい反省。いつもひとり行き、失敗厳禁、家内にメモを残しているが。急坂や崖の下り、予期せぬ法面の高さ、7mm、20mロープ、ダブルでムンターヒッチで簡易ハーネス接続、これは楽々安全。同伴者がいればアッセンダーで登れば楽々（米神山では有効）。笑われようが仕方ない。20数年間、首藤、後藤両氏と高校登山にかかわってきたが、ヤブ山はこの会で初体験。10年以上前か、11月月例山行（飯田氏不参加）、鮎帰から地形図の破線で示された荒れた作業道を北西へ。ヤブ突破、適当に降下

して、園田さんが気づいて田原山東、三等543.0mへ戻り、これにて現在地判明。それから北西へ、無事東裏から田原山へ。入門期、心配、忘れられない山行。それ以来ヤブ名人飯田勝之氏の影響大である。

私は地形図「　犬飼　」　が近郊では一番いい山が多いと思う。以下、8つの二等、三等三角点。地点名、武山、烏岳、柚野木、約60分。乙見、城、大谷山、秋葉山、久原山、約25分。

運転もきつい。近いがよい。16枚の中から、順次老人向きヤブ山を私なりに選択していきたい。

“はるかなる山の呼び声に誘われて”

・・・星子貞夫

(2010 年 6 月カナダの山旅日記)

前号の続き

6 月 21 日　天気晴れ

今日は午前中バンフの裏山サルファー・マウンテン(2270m)にゴンドラを利用して登り、午後　モレン・レイクでテン・ピークスの景観を観る予定である。9時 10 分に出発する。

サルファー・マウンテンのゴンドラ山頂駅から遊歩道を歩いて、サンソン・ピーク(Sanson Peak 2270m)に登り、バンフの町を俯瞰し、カスケード・マウンテン(2997m)ランドル・マウンテン(2948m)などバンフを象徴する山々や遠くロッキーの山並や谷をみる。

午後モレン・レイクを訪れ湖の流れを堰き止めたターミナル・モレンに登り、カナダの紙幣の図柄にもなったテン・ピークスを観る。下山後湖の右岸を散策し氷河の融水の流れ口まで行く。　帰路レイク・ルイーズ・ビレッジでコーヒー・ブレイクをしてキャンモアのスーパー・セイフウエイで食材やワインを買って帰る。B&B 着 18 時 45 分であった。

6 月 22 日

キャンモアでは曇りであったがレイク・ルイーズを過ぎると雨となった。コロンビヤ氷河はキャンモアから 202km で 93 号線沿いにある。

今日はコロンビヤ氷河の見学で一日を過ごす。

バンフから 1 号線と 93 号線の分岐までの区間を大幅な道路工事中である。アニマル・ブリッジを 3 ケ所も新作している。

93 号の分岐を見落として 1 号線に入り、途中で気づいて引き返す。

コロンビヤ氷河の面積は 325 平方 km でその厚さは 365m と推測されている。北アメリカ大陸の分水嶺でここから流れ出した水は北極海、太平洋、大西洋の 3 大海洋に注いでいる。

流れ出す氷河の一つアサバスカ氷河に特殊車両スノーコーチでドライブして見学する。左岸にマウント・アンドロメダ(3443m)とマウント・アサバスカ(3493m)が聳えている。

とけた水が小さな小川となって流れている。ペット・ボトルに汲んで帰り、夜の水割りにする。この水を飲めば寿命が延びるということである。駐車場の周囲にインディアン・ペイント・ブラシが咲いていた。

6 月 23 日

今朝も三姉妹が美しい姿を見せている。

今日は待望のアシニボイン･ロッジに入山する日である。マウント・アシニボイン(Mt Assiniboine 3611m)はその秀麗な三角錐の形から、カナダのマッターホルンと呼ばれている。その名は 1880 年代にこの地方で狩をしていたストニー・インディアンの酋長の名にちなんだと言う。　その姿を映すレイク・メイゴックとともにカナディアン・ロッキーで最も美しい場所と言われている。

自動車道路はなく、入山するには 27km の道のりを歩くかヘリコプターを利用するしかない。

もうひとつの難題は予約が取れない事である。リピーターが多く帰る時に来季の予約をするからである。そして季節の終りには来季の予約は完了する。我々は 2 年前から模索していたが昨年の暮にキャンモア在住のチャーリ氏を通じて今年は 6 月 23,24 の両日のみ空きがあるとの知らせを受けた。季節が一カ月早かったがこの日に合わせて旅程を組んだ。

ヘリポートはキャンモアから車で 42km のマウント・シャーク・ヘリポートである。

入口を見落として熊に出会ったりしたが無事チェクインタイムに間に合った。11 時 30 分である。

ヘリは山火事で点々と黒く焦げた針葉樹林帯の上を飛び、

ワンダーピーク(2680m)の岩壁をかすめて 10 分でロッジ・ヘリポートに着く。かつて徒歩で入山した道を目で探ったが、すぐに見失った。

ロッジ二階に 7 名、キャビン 2 棟に 3 名ずつ分宿する。ロッジの部屋は暗く狭い。窓からなにも見えない。キャビンは独立した建物で広く明るく、眼前にアシニボインと湖が一望出来て、大声で騒いでも迷惑がかからない。朝焼けのアシニボインを居ながらにして撮影できる。

2 時 30 分ロッジから湖の北岸を散策しキャンプ場を回りロッジにかえる。この時期季節が早く、湖は白く凍りキャンプ場も深い雪の下であった。

夕食はアルゼンチン・ワイン、マーベックの乾杯で始まった。豪華な食事に舌鼓をうつ。

6 月 24 日

晴れているが雲の多い一日である。アシニボインの頂上は霧がまつわりついてすっきりした姿が見られない。早朝赤く輝いた山頂をわずかに見せただけで下山するまで遂に全望を見せないままであった。

朝食後テーブルに並べられたパンやチーズなど様々な食材を自由にとり、昼食として準備した。コーヒー、ミルク、茶など全て飲み放題であった。

オーナーの妹マリーンさんがトレッキングの案内をしてくれた。

雪が深く歩きにくいので、雪のない斜面をナブレットに登る。雪深い谷間に熊の冬眠場所があると言う。雪面に新しい熊の糞や熊が地面を掘り起こして草の根を食べた跡などか点在している。

ウエスタン・アネモネとウエスタン・スプリング・ビューティーが白い花を咲かせていた。ナブレットで小休止の後希望者でナプピーク(2743m)に登る。

ナブレットからの下は正面にアシニボインそして眼下にレイク・メイゴック、エリザベス・レイク、セルリアン・レイク、サンバースト・レイクが見えたが、すべて白い氷に覆われて単調な風景であった。

下りの道が雪で閉ざされていて、急な傾斜を雪滑りして下った。3 時 20 分にロッジに帰る。

夕食はアルゼンチン･ワインのマーベックではじまった。

6 月 25 日

早朝アシニボインが赤く染まった朝焼けを写真に収めようと、早起きをして待機した。

5 時 30 分に山頂部分が赤く輝いてきた。しかし山頂に纏わり付いた雲が遂に最後まではなれなかった。

今日はキャンモアに帰る日である。ヘリのチェックインは 13 時 00 分である。

湖のほとりを散策して最後の記念撮影をする。

夕食は飛び切り上等の鮭を買った。実に旨かった。グレートであった。

6 月 26 日

5 時 30 分にスリー・シサターズの朝焼けをみる。小雨模様である。

今日はフェアビユー・マウンテン(2744m)に登山する日である。朝食を 7 時 00 分に始めて 7 時 40 分に B&B をスタートする。

（次号へ続く・・・・）

私の無名山ガイドブック 46

・・・飯田勝之

里山の稜線歩き（その 17）

今回は大分市内の里山を紹介しよう。いずれもコースは短く、わざわざ行くには物足りないが、照葉樹の多い自然林の中で里山の風情を楽しめるので、近くに来たついでにちょっと歩くと面白い。

大　内　299.7m

ここは九六位山へドライブとハイキングで行ったついでなどに訪ねると良い。近くには夜明ヶ城の四等三角点もある。九六位山円通寺の前から南へ約１ｋｍで右に分かれる林道があり、これを右に緩く下ると三叉路から約 700m で、右に入る荒れた作業道がある。鎖のゲートのあるこの道がとりつき点だ。戸次から入る場合は下戸次の中村から大内川に沿って上るとよい。上大内への分岐を左に分けて、さらにその先で影平への分岐を右に分け、細い林道を上る。舗装された林道が続いていており、最奥の大内の民家を過ぎて、影平分岐から約 1.6km の大きな右カーブの先である。

この作業道は約 50m先で小稜線を越えて判然としなくなる。ここより稜線を西に伝うが、めざす三角点はここより 40m余り低いところにある。稜線は、所々ブッシュがあるものの、おおむね踏みあとがあり、歩きやすい。それに露岩の多い稜線歩きは変化を楽しめて、照葉樹の多い自然林の中なので、心地よい風の道だ。

小さなアップダウンを重ねながらわずかずつ下っていくと、１５分ほどでやや急な下りとなる。木の枝などに捕まりながら下るが、すぐに平らになり、その少し先の平らな稜線上に四等三角点がある。稜線はその先から急傾斜で高度を下げている。

地形図 25，000 分の１「戸次本町」

参考コースタイム林道～20 分～大内三角点大内

吉　野　195.1m

ここは、吉野梅園などを訪れたついでに足を伸ばしてみると良い。吉野の辻から北に新しい県道吉野原犬飼線を行き、県道臼杵大南線の吉野市から儀徳に入る市道を進む。儀徳尻の集落を過ぎ、県道から約１ｋｍで道が二股に分かれ、右は小橋を渡って奥の民家へ至っている。この二股の左が登り口となる。

細い荒れた舗装の林道が山腹を斜めに北西に上っており、5 分ほどで南北に連なる小さな稜線に至る。道は北へさらに延びているが、ここよりやや戻り気味に鋭角に左手の稜線にとりつく。平らな稜線はヒノキ林であるが、100ｍも行かずに傾斜が出てくると照葉樹の多い天然林となる。心地よい稜線歩きとなり、ほどなくかなり急な登りとなるが、それも 3,4 分で緩くなるともうそこは山頂の一角だ。林道から１０分あまりの稜線歩きであるが、里山の風情の中に、シイやカシやヤマザクラの巨木、古木があり、春のころなどは楽しい稜線だ。小さな山頂には四等三角点がある。

地形図 25，000「戸次本町」

参考コースタイム　林道分岐～5 分～稜線～10 分～吉野三角点

「34年のあゆみ」　・・・西孝子

日本山岳会入会は今西錦司先生と出会いで山行 180 度転換した。車で案内する時、見える山を全部聞かれた。低い山等、頭の中にはまったく入れてなかった。私に地図を見ながら聞かれるが説明のしようがなかった。これが 45 歳の時より「どんなに低い山でも登ればおもしろい」と知らせてくれた。

錦司先生は車中でも一度も居眠りをせず地図と地形をにらめっこしていた。おかげで 2 万 5000 分の 1 の地図に赤線を引き、山行を反省するようになった。地図は地形を物語る本だと思うようになった。先生 72 歳の時いただいたはがきに「運命に逆らうすべなきも運命に屈するを欲せず、これを運命とたわむるるという。」私が 72 歳になった時、運命とたわむるるということが分かるだろうか。今、79 歳にして先生の温かい言葉が身にしみるようになった。ダーウィンの進化論を批判し、住み分け論をじかに私は聞いた。種は突然できるもの、と私も思うようになり、生物の生き様を見る目が変わってきた。

東九州支部も月１回の山行はなく、松田雄一氏が大分に住むようになり支部山行も回数が増えた。支部 20 周年はマナスル登頂者他（社）日本山岳会 11 代三田幸夫会長を案内して法華院温泉で講演と懇親会を開いた。これが一番最初の大事業であった。

「　私の山や　」　・・・三浦　敬志

平成 23 年 4 月 30 日（土）二豊山岳会月例山行で、小豆島に岡村と丸山三名で向かう。佐賀関九四フェリー二十時の便にギリギリに間に合う。今回の月例山行は星ヶ城山 917ｍと標高は低くあとは、「二十四の瞳」の映画村、翌日は呉の「ヤマトミュージアム」をまわる計画で、観光が主体になり山の登り方も年齢と共に変わってきました。

去年は二豊山岳会九十周年の年で、今年は百周年に向けての第一歩であり、私が二豊の会に入会した当時のことを思い出しました。幼なじみの二豊山岳会の先輩である故竹林さんに誘われ、地元の山ガラン岳に十七才の時初めて登り、それからは山にとりつかれて、鶴見岳縦走・雪の由布山・四季を通じて九重山に通い大自然の美しさ、また山頂に登りついたときの壮快な気分が忘れられず単独で登っていました。何時の頃か竹林さんから二豊山岳会に入れと勧められたが、人との付き合いが苦手な私は一人で、自然の中にいるのが好きでした。二豊に入ったきっかけは何故か思い出せないが、昭和三十六年頃の入会だった思います。今までにない山行が広がりロッククライミング、祖母傾縦走、槍穂高縦走、山仲間との付き合いの楽しさを知り、山との出会いにより人生の転換期になりました。

4 月 30 日（土）三崎港 21：10 着、大洲インターから高速道に入り高松港には夜中の 0：30 着、手頃な仮眠場所がなく立体駐車場の車内で仮眠。

5 月 1 日（日）高松港朝 6：20 出発のフェリーで小豆島へ向かい、船中で昨夜の弁当の残りで腹ごしらえ、所要時間一時間十分で小豆島土庄港着、寒露渓ロープウェイ頂上駅に 8：20 着。ここから星ヶ城登山口、風が強く結構寒かったが歩き出すと温まり、登山道はなだらかな勾配が続き歩き易かった。西峰と東峰があり西峰に立派な石碑があり、東峰の山頂だと勘違いしたが、まだ先に頂上があり東峰 10：10 着。

東西両方の頂上とも見晴らしがよく、眼下に広がる瀬戸内海と点在する島々が一望の下に見え、また南北朝時代に築かれた山城の石積が残っており、いにしえを偲ぶことが出来、時間のたつのも忘れ頂上に留まった。今夜の宿は、高台の小豆島ふるさと村の中にある国民宿舎、ここも海や港が眼下に見渡せる眺めのいい場所であった。

5月2日（月）土庄港から8：00発フェリーで新岡山港に高速道で、大三島の大山祗神社を参拝して博物館見学、源平時代の様々な刀や鎧に見入り足がなかなか次に進まない、車に戻った時は一時半を過ぎていた。次の目的地ヤマトミュージアムに着いたのは三時半をすぎていた、ここでもゆっくりと時間をかけて見学。縮尺十分の一の戦艦大和の模型も見ごたえがあり、他にも各種戦艦の模型が数多く展示されて時間のたつのも忘れ、六時閉館の館内放送を聴きミュージアムを後にした。呉市内から車で四十分近くの野呂山という頂上近くの、キャンプ場で料金を支払いテントを設営。家から持参した猪肉と早速昨日小豆島のオリーブ園で買った、オリーブ油と塩コショウでステーキをつまみに、冷たいビールを飲みながら次回七月の月例山行白山に話が弾んだ。

若い頃は気のあった山友達と、一緒にテントの中で夜の更けるまで酒を飲み、これからの山行に夢を膨らませ語合ったものです。岳友を若くして二人共山で亡くし、家族の人達の悲しみを目の前にし、如何ほどかと言葉に表せなく寂しく過した日々もありました。

この年になり今思えば仕事と山しか頭になく、家族からはお父さんは何時も子供の日と正月は山に行って、いなかったねと言われ申し訳ないと思っています。

山と付き合って早半世紀になり、後十年もすれば二豊山岳会も記念すべき百周年だ、当面の目標は現会長の

岡ちゃんと、元気で記念山行が出来るよう山登りを続けていき、その日を楽しみにしています。

5月3日（火）テントを撤収し陸続きで一路別府へ、ゴールデンウィークの時期にしては高速道路の渋滞もなかったが、小倉から椎田線に入る辺りから、渋滞に遭ったが今回も無事に別府15：00着。

より安全な登山のために　・・・安東桂三

平成23年6月21日夜、久保委員より支部報に、何か書いてくれないかと原稿依頼がありました。技術的なものあるいは何か会員・会友に刺激になるもの、400～600字でとの依頼でした。

本年、日本山岳会東九州支部定期総会にて役員の改選があり長年支部長の任を務めた梅木秀徳氏から、加藤英彦氏へとバトンタッチされ新しい体制でのスタートとなりました。その加藤支部長の就任挨拶文には『自分はどうして日本山岳会に入会したのか』との再認識をせよと意識改革の弁が強く出ていました。

その支部長の下で、支部報に何か原稿を書いてくれとの依頼に躊躇しましたが、私は野口秋人（元東九州支部長、故人）、松田雄一（日本山岳会名誉会員）の紹介により日本山岳会東九州支部に入れていただいたことを考え、つたない経験、知識から得たものをすこしずつ文にしておこうと引き受けました。そして、日本山岳会東九州支部報（第53号）を三度、読み返しました。

『長野県警から私の携帯電話にかかってきた』

平成23年のゴールデンウィークは、私の仲間（大分緑山岳会々員、及びOB）にて、北アルプス白馬岳主稜を目指しました。

大分を4月28日20時、自家用車2台で出発。宇佐別府道、九州道、中国道、途中休息をとり、名神高速道、北陸道と走り、糸魚川ICより、一般国道へ。長野県の白馬村へ着いたのは、丁度29日のお昼。スーパーで買い出し、猿倉へ。昼食のあと、猿倉荘の登山届ポストへ登山計画書を投入、それぞれが荷物を担ぎ雪の道を歩く。近道をしようと、尾根道を登るが、どうもおかしい。白馬杓子岳の東尾根を登ってしまった。それで途中より支尾根を下り、白馬尻への林道に下りつく。林道と言っても、雪が1m以上の積もった雪の斜面。少し時間がかかったが、白馬尻へは午後3時頃着。

その白馬尻には、テントが数張り張ってある。我々はそのテント横を左の方へ（右岸へ）登っていく、右岸尾根に登りあがる。そこにも、テントが数張り張ってあった。そこで、垂直に立ったダケカンバの木のある雪の斜面を整地、穴をほり、テント設営。夕食の準備に取り掛かる。雪を集め、コッヘルにかけ雪から水へ、そして調理。小宴会。

夕刻、テントの上空をヘリコプターが激しく飛び回る。何かが起こったのだろうか？と、推察。でも、酒呑みが、忙しい。そこへ、アマチュア無線で、連絡が入る。相手は、大分緑山岳会々員で、大船渡に勤務するF氏。雪崩遭難と言う。

F氏は、3月に転勤で大船渡へ行ってしまった。そして、2週間で震災体験、孤児（？）となる。でも、生きていた。

緑の仲間は、F 氏の消息を心配し、無事を祈っていた。F 氏は、山が好き、F 氏は山に行きたいが食べることが一番、生きることが一番。でも、我々が白馬主稜の計画を送ると、大船渡から福島、新潟と自家用車を飛ばし、白馬尻へ駆けつけたのだった。F 氏は、夕刻 5 時を過ぎて入山。そこで、雪崩遭難の報を聞きアマチュア無線で連絡してきたのだった。我々のテント設営位置を伝え、F 氏の来るのを待ちながら、酒飲み。丁度、暗くなったころ F 氏到着。痩せた F 氏。震災の苦労が窺がえる。無事を祝って、宴会。深夜、荒れる。風強く、テントのポール曲がる。明け方、落ち着く。

30 日。天候不良だが、取りあえず白馬大雪渓をトラバースし、主稜末端尾根に取りつく。P8 まで登る。最初は、白馬の山頂付近まで眺望があったが、次第に雲が下がってくる。メンバーの内、一人、体調悪く今回はこれまでと、下山決定。テント設営の BC へ、下山。撤収。丁度、撤収し終わった時に霰、稲光、雷、雨。急いで、猿倉へ。猿倉では、雨となり皆ずぶぬれとなった。後は、糸魚川へ。夜は、糸魚川市営美山キャンプ場で、また宴会となった。その時、長野県警から、携帯へ連絡が入ってきた。それは、我々が猿倉荘に登山届を提出していたので県警からの無事の確認の問い合わせだった。大雪渓の雪崩では誰が雪崩に飲み込まれたのか？ 何人飲み込まれたのか？ 判らないと言う。登山届（計画書）の提出率は、積雪期（残雪期）でも精々 30%程度。この電話がかかってきたときには、まだ遭難者は 1 人だった。その翌日に、また一人判明。計 2 名の遭難死亡と思われていたら、5 月の中旬になって、また雪の中から一人出てきた。

今のところ、3 名の死亡と思う。（この文書を書いている 6 月中下旬）登山届（登山計画書）を全パーティが出していれば、そこらあたりの所はクリアーになるし、捜索、救出もスピーディに行えるはずだが、余りにも出さないパーティ・登山者が多い。残念なこと。今年の、4 月末には北アルプスにて、1 週間で 1mの積雪があった。雪崩の起きる確率は、高かった。また、ゴールデンウィークの白馬尻の小屋付近には、テントが数張り設営されていた。我々はその場所をさけ右岸尾根に登り、テントを設営した。それは、なぜか。

白馬尻小屋は、秋には取り壊しつぶして冬を迎える。初夏になると掘り出し、プレハブを建て夏の間だけ営業する。

これは、長い経験で雪崩で小屋がつぶされることが判っている。今までに、雪崩が起こったことがあるということ。そのような所には、間違ってもテントは設営出来ない。

でも、そのことが判ってないパーティ・登山者が多い。

我々は、その上、テント設営の場所を垂直なダケカンバのある斜面とした。木があるという事、その木が曲がってない、垂直という事。これは、その木が育つ環境がそこにあったということを意味する。

雪崩が起これば、あるいは雪の動きがあれば、そこには、木は育たない。もし育っても、雪崩が起これば、あるいは、雪の動きがあれば、木は曲がってしまう。

垂直に育ったダケカンバは、その生命の間は、安全なエリアであったと推察される。そこが判ってないパーティ・登山者が多い。いま流行りの『想定外』があるにしても、安全に行動するにはいくら努力を行ってもしすぎることはない。

今年のゴールデンウィークは、4 月 30 日の天候（幾分良い天候）を逃せば、後は悪天と推察していた。そのことが判っていたので、30 日に p8 より直ちに退却した。諦めが早いのではなく、今回は安全にそうするのがベストだというのが我々の考えだった。そして場所を替え、大分へ帰る途中に伯耆大山へ向かい、三の沢からコマドリ峠を越え、コマドリ小屋へ、登り返してキリン峠山へと登山した。

そこでも、異常な集団を発見。我々は下山キャンプ場にキャンプしたが、そこは夏山装備の登山者だらけ。今年のゴールデンウィークの大山は、ピッケル・アイゼンが必要と

メディアなどで呼びかけられていたが、夏山装備の登山者ばかりだった。やはり、道迷いのパーティが出て、十数人が山中で一泊することとなり警察、遭難対策協議会のメンバーに救助されることとなった。

その彼らの弁は『雪が多く、道が判らなくて……』とのこと。

インフォーメーション

月例山行

7月月例山行のお知らせ

対馬の山歩き

7月29日(金)

大分発 19：42（ソニック 42 号）～博多着 22：01

タクシーで博多港へ

７月３０日（土）

博多港発 0：10～（九州郵船）～厳原着 4：45

レンタカーで島内を移動～上島へ

仁田内登山口～御岳（479m）～仁田内登山口

下島へ

洲藻登山口～白岳（518m）～洲藻登山口

竜良山登山口へ（野営）

７月３１日（日）

山ノ上登山口～竜良山（558.5m）～山ノ上登山口

有明山登山口へ

上見坂登山口 ～有明山（558.2m）～上見坂登山口

厳原港へ

厳原発 15：25～（九州郵船）～博多港着 20：10

タクシーで博多駅へ

博多発 22：05～（ソニック 59 号）～大分着 00：35

※ 詳しい登山計画は、参加者で協議して最終決定します

8月月例山行のお知らせ

姫島の山歩き

8 月 14 日

大分発 7：00

伊美港発 9：50

矢筈岳ほかの後、夕方姫島盆踊り鑑賞のあと帰路へ

9月の月例山行のお知らせ

大入島と八島の山歩き

9 月 25 日（日）

午前 5 時大分発

10月の月例山行のお知らせ

福江島と上五島の山歩き

10 月 8 日（土）、9 日（日）

午前 5 時大分発

書籍情報

- 九重山　法華院物語―山と人―

  著者　松本征夫・梅木秀徳　　弦書房

  コメント …前支部長の梅木秀徳さん最新著作です。

- 冬のデナリ

  著者　西前四郎　　福音館文庫

  コメント …支部主催の講演会の関連書籍です。

平成 23 年度　年間　月例山行予定および実施状況

月	期日	山　　名	リーダー	予定費用	参加人数	コメント
5	21	**天草**　白岳（372.8m）、倉岳（682.2m）、次郎丸岳（397.1m）、他	加藤英彦	5,000 円	6名	茅野亨生さんにお会いする
6		**屋形島**　屋形（198.7m）、 **深島**　深島（98.0m）、南深島（79.8m）	飯田勝之	4,000 円	8名	台風で島に渡れず
7	29～31	**対馬・上島**　御嶽（479m） **対馬・下島**　洲藻白嶽（519m）、矢立山（648.5m）、有明山（558.2m）、竜良山（558.5m）	飯田勝之	30,000 円（5名参加の場合）		
8	14	**姫島**　矢筈岳（266.6m）	中野 稔	3,000 円		
9	25	**大入島**　久保浦（193.7m）、高松（173.9m）、 **八島**　八島（98.0m）	下川幸一	2,000 円		
10	8～9	**福江島**　鬼岳（315m）、箕岳(144m)、七ツ岳（432m）、父ケ岳（460.8m） **上五島**　御嶽（439.2m）、雄岳（401.5m）	加藤英彦	20,000 円（5名参加の場合）		
11		**屋久島**　宮之浦岳（1936m）、永田岳（1886m）				
12		**保戸島**　遠見山（178.6m） **黒島**　南黒島（84.5m） **沖無垢島**　沖無垢島（142.4m）				
1		**蔦島**　羅洲（64.4m） **黒島**　北黒島（27.2m） **津久見島**　津久見島（166.2m）				
2		**奄美大島**　湯湾岳（694.4m）、南郷山（307.7m）ヤクガチョボシ岳（440.6m）				
3		**大島**　大島（193.3m）、船隠（130.9m） **高手島**　高手島（30.2m） **横島**　横島（138.4m）				
4		**平戸島**　志々伎山（347m）				

編集後記

≪目次の仕分けの説明≫

会務報告…山行以外の会務・会議議事録・会計報告など

活動報告…主に山行報告。支部山行・個人山行など

トピック…思い出の山行などの紀行文。登山技術に関する文章など

インフォーメーション…会員情報・登山情報・山関連情報など

≪読者の声≫

会報に関するご意見・記事原稿などは次のメールアドレスへお送りください。 yariho1953@yahoo.co.jp

2011 年 7 月 25 日　発行
東九州支部 支部報 54 号
発行者　加藤　英彦
編集者　久保洋一・中野 稔
発行所　事務局　〒874-0820
別府市原町 5-14 飯田勝之方
tel・fax 0977-21-3437